

可認物便郵種三第省信遞日六廿月二十年一十三海明  
(行發〔日五十、日一〕回二月每)行發日五十月四年五十二



# 報時教改

號七十七第

## 目次

### 社説

新聞紙の徳義◎伊藤侯の宣言と總選舉……………

### 論説

總選舉に對する吾人の所懐(承前)……………柴田常惠  
醫師と宗教……………大岡力戈

### 社會

◎滿洲條約◎内務省の訓令◎釋尊降誕會◎眞龍女學校の卒業式◎教界彙報◎紛々録

### 雜錄

つまらぬ記(承前)……………劍  
佛教辯士の評判(三)……………自稱辯士

### 信界

一念の安慰……………穉川生

### 今昔

前田利家(五)……………百目木劍虹

### 會報

會頭久我侯爵北陸巡回日誌

大日本佛敎徒同盟會綱領

- 一、佛敎本來の面目を發揮して、各自の信念を確立し、國民の道徳を涵養し品性を陶冶する事。
- 二、佛敎の本旨に基きて人道の大義を唱導し、精神的結合によりて國民の一致を鞏固にし國家の隆盛を企圖する事。
- 三、佛敎護持の責任を全ふし、健全なる宗教界を形作る事。
- 四、各宗僧侶を獎勵し、其學徳を高めしめ、又從來の惡弊を改善せしむる事。
- 五、公認敎制度を調査すること。
- 六、社會問題を講究して、慈善事業を起し、社會の改善を企圖する事。
- 七、佛敎の精神に基ける諸種の教育特に普通教育女子教育を獎勵して、善良なる家庭を形作りしめ、又社交を融和せしむる事。
- 八、積極的方針を取り、實業道徳を鼓舞する事。
- 九、敎界の組織及儀式をして時勢に順應せしむる事。
- 十、社會に於ける一切の迷信を勦絶する事。
- 十一、殖民傳道を獎勵する事。
- 十二、佛敎の光輝を發揚し、其感化を普く世界に光被せしむるの策を講ずる事。

政教時報

新聞紙の徳義

新聞紙は社會の木鐸なり、天下の耳目なり、宜しく萬般の出來事を正確に報導して過まらなく、人心の向ふ所を指示し健全なる輿論を喚起して一代を導き、以て人智を新たにし品性を高尚ならしむべし、

現今發行される、幾多の新聞紙は、知らず此目的を抱きて世に起ち、その實を擧ぐるに勉めつゝ、ありや、固より彼等は直筆論論して毫も所信を枉げず、正義を擁して屈せず、或はまた不羈獨立、權貴に阿らず正を正とし邪を邪とし以て事實の真相を説くと云へり、然れども唯云ふのみ、その實に至ては大に然らず、

政黨の機關たるものは已に議論の公平を保つ能はず、苟も事の他黨に關するものは、針小棒大、無根の事實を捏造して攻撃の材料とするを厭はず、腐敗の極に達せる今の政黨の下にある機關紙たるを思はば、云ふ所の公論なるものも略ぼ察するに難からざるなり、而して不羈獨立と稱するものは政黨に屬せずと云ふに過ぎずして、何等か或勢力の機關となりてその利用する所となるを常とし、政黨所屬の新聞紙と擇ばなく、其弊却て前者に勝るものあり、之を要する中に二三の比較的其弊少く、新聞紙本來の目的に副ふに近きものありと雖、

社論

○政教時報第七十六號目次

- 總選舉に就て
- 總選舉に對する吾人の所懐(柴田常惠)
- 總選舉に對する準備(改良の聲)
- 佛敎青年會春季大會(山口佛敎青年會)
- 監獄改良の一端(敎界彙報)
- 紛々録

雜錄

會令信

- 先德餘香(其十二) (文學士木多高陽)
- 獨乙より (文學士近角常規)
- つまらぬ記 (劍 虹)
- 比叡山上の青年 (曉鳥敎)
- 前田利家(四) (百目木劍虹)
- 會頭久我侯爵巡回日誌

一部	一ヶ月	六ヶ月	一年	全
金貳錢五厘	金五錢	金三拾錢	金六拾錢	無
				送
				料

●廣告料五號活字一行(二十七字詰)一回金拾錢

●爲替振込局は、本郷森川町郵便貯金爲替取扱所(宛)の事

●爲替受取人名宛は「東京本郷森川町一番地大日本佛敎徒同盟會出版部」とせらるべし

東京市本郷森川町一番地

發行所 大日本佛敎徒同盟會出版部

明治三十五年四月十五日印刷

明治三十五年四月十五日發行

印刷所 東京市本郷森川町

印刷人 百目木劍虹

大抵皆政黨若くは或勢力の機關に屬し、滔々偏頗固陋の弊に陥らざるはなし、

吾人は必ずしも機關新聞を非とするものにあらず、一定の主義綱領の下に多數を合一して政黨を組織するもの、運動を敏活にしその實効を擧げんとせば一日も機關新聞なかるべからず、然れども機關紙たるの故を以て自黨の行動は措て問はず、他の黨派を見ると蛇蝎の如く、譏誣、中傷、嘲罵、陷罪に至らざるなく、却て所屬政黨の品格を失墜する鮮少にあらず、此の如きは新聞紙本來の目的に副はざるのみならず、新聞紙としての徳義は九何れにかある、

管に之に止まらず、新聞紙また一種の商賣たるを以て、發賣部數の増加を欲し、人類の弱點に乘じ罪惡の記事に力を注ぎ、殘酷なる殺人事件、又は卑猥なる事項に貴重なる紙面の大部分を割くが如き、新聞紙としての用意果して缺くる所なきか、殺人事件ありし後には必ず之に類する反罪續發し、猥褻事項ありし後にはまた必ずこの種の痴態を演ずるもの多し、この種の誘惑を起すもの實に新聞紙の記事にあるを思はば、今の新聞紙は社會教育者にあらずして確に或罪惡を教ふる誘惑物なり、

新聞紙は社會的制裁權を有する者なり一度紙上に掲げられたる記事は一篇の取消文に依て能く拭ひ去らるゝものに非ず、而も取消文は極めて人の注意を惹かざる部分に掲げらるゝを常とす、此故に世人の新聞紙攻撃を恐れざるなく、殊に人氣を以て立つ商家劇場等の如き最も其たしとす、新聞紙の

暴横なるこの機能を濫用し得かすに攻撃を以てし、多額の金  
錢を強請して止まず譬へ事實無根にして衷心疚ましからすと  
するも社會に對する信用上、遂に其無法なる要求に應ずるの  
止むなきに至る、新聞紙の罪惡此に至て極まれりといふべ  
し、憐れかつ慨せざるべけんや、彼等をして此に至らしめたるも  
のは、一に記者の識見なく學殖に乏しく畢竟精神上の訓練足  
らざるに依る、今日の急務は適當の人才を選擧するより他に  
其策なかるべしと信ず、頃者警視廳にて新聞紙取締法を一層  
嚴にすべしとの説あり、吾人は社會の耳目たる新聞紙か、他  
より監督さるゝに至りたるを悲むと雖、現今の状態亦洵に止  
むを得ざらむか

### 伊藤侯の宣言と總選舉

政友會總裁伊藤侯か來るべき總選舉に關して其會員に警告せ  
る宣言書を發表せり、左の如し

(上略) 廉潔、自由、誠意を以てするにあらざれば、選舉によ  
り眞正なる國民の代表者を得る能はざるか故に、我會は一  
切の不法なる壓迫と不正なる誘惑とを杜絶し、公明正大な  
る實行に依りて他をして自ら戒愼せしめ、敢て憲政の美を  
潰かすに至らしめざるを期すべきのみ、夫れ健全なる選  
擧區ありて始めて健全なる議院あり、自ら進んで其模範を  
示すは、是れ我會の宿志に外ならず云々  
此の宣言を以て平々凡々一も取るに足らずといふものあれど

豈。節。制。を。加。ふ。る。の。理。あ。ら。ん。や。、。要。は。唯。廉。潔。、。自。由。、。誠。意。を。以。て、。他。の。不。法。な。る。壓。迫。と。不。正。な。る。誘。惑。と。を。斥。け、。佛。教。的。信。念。の。素。要。あ。る。人。物。を。多。數。に。選。出。せ。ら。れ。ん。こ。と。を。望。む。の。み、

### 論說

## 總選舉に對する 吾人の所懷 (承前)

柴田常惠

此の如くんば多しと云へる五千の候補者も、尙その乏しき  
を覺へり、人なきにあらず人才かきなり、職々碌々の徒幾百  
千を以て數ふるも、職に堪ふるの士なくんば人なしと云べし、  
人才の缺乏如何に甚しと雖も、堂々たる日東の島帝國、一定  
の主義と理想を有し、頭角を彼徒の上に抽んずる恰好の紳士  
豈なからざらんや、然も此等の士殆んせ形を隠して世に顯れ  
ざるものは、多少の經驗を政治上に有する老朽者に隨喜し、  
後進の英才を度外視して驅みざるも、政界の腐敗豫想の外に  
出で、皓潔なる人士が紛々たる狂瀾の中に入るを屑しとせざ  
るに由るなり、

世は盲目なる哉、大勢は駭々として推移し、昨日の淵瀬今  
日の瀬となり、今の蒼田また忽ち變じて碧海となるものを、  
何すれど世人は舊物に戀として新に就くを忘るゝ、試みに  
今の候補者を見よ、多くは之れ多年政界に立てる老朽の人な

も、吾人は侯が此の宣言をして一片の空文たらしめず、若々其  
實行に歩を進まば、腐敗せる現今の政界を一掃するに於て其  
効顯著なるものあらむ、正々堂々決して凡庸なる宣言にあら  
ざるを信ず、山來政黨の宣言にして金玉の文字を臚列し天下  
に發表したるもの殆ど枚擧に追わらず、而も實行の効果を示  
したるもの寥寥として晨星も管ならざるの憾あり、願ふに侯  
の宣言も亦無用の空文たるに過ぎざるなきか、吾人は素より  
籍を政黨に措くものにあらず、從て何れの黨派にも關係を有  
せず、然れども社會道徳の腐敗を憂ふること一日にあらざる  
なり、之か救済の策を講ずるは謂へらく此の濁れる政界を一  
掃するにあらざれば眞正に其目的を達すること能はざるなり  
と、

今侯の宣言を讀み、端なく吾人の所懷と一致したるを喜  
ぶ、殊に總選舉に對して全然贊同の意を表するに躊躇せざる  
なり、吾人總選舉に關しては本誌上既に其意見を縷述した  
り、要は伊藤侯の宣言と同一にして、廉潔、自由、誠意を以て  
するにあらざれば、選舉に依り眞正なる國民の代表者を得る  
能はず、といふが如き、何人も異論なかるべし、希くは我同  
盟會員廉潔、自由、誠意の六字を熟讀玩味せられんことを望  
む、

世人往々誤りて吾人を目して選舉に干渉するものなりとい  
ふ、何ぞ強ふるの甚しきや、選舉に關して宗教家の狂奔すべ  
からざることは國法の禁する所にして、譬へ宗教家にあらざ  
るも猥りに干渉すべきものにあらず、選舉は人々の自由なり、  
り、吾人は固より既往に於て或は立憲制の施設に、或は政務  
に參し公共の事に關つて、心思を凝らし粉骨の勞を惜まざり  
し多少の功を認めて尊敬を怠るものにあらず、彼等が維新以  
來百度未だ緒に就かざるの時、中央に地方に著々事に處し、  
能く今日あるを致せし功勞は頗る大なるものあり、永く先  
輩として尊敬せざるべからずと雖も、尊敬の價値は既往にあ  
り、代議制度設けられてより此に十有餘年、彼等が活動の舞  
臺は既に去れり、苟の有する經驗は自ら深く負む所なりと雖  
も時代に後れて用ふるに足らず、然も世人は尙老朽の士に渴  
仰し後進の英才をして力を伸す能はざらしむる如きは、濫り  
に甲冑を珍重し、戰術巧みなる現代に於て貫し以て其効を舉  
げんとする愚に等しと云ふべし、加ふるに老朽の徒氣力銷亡  
して雄大なる希望を有せず、地位に戀々し黃白に眩み易く、  
政界の腐敗をして今日に至らしめたる原由彼等にあるに於て  
をや、

更に選舉運動の内情を窺はんか、弊實深く膏肓に入りて容  
易に革むべからざるものあり、その運動は主義と主義と戦ふ  
正大なる君子の争にあらざりて投票買収の意なり、酒食を以  
て歡心を得るの義なり、讒誣以て敵を中傷するにあり、暴力  
以て選舉民を脅すにあり、國會も縣會も乃至村會議員選舉に  
至る迄皆然らざるはなし、而して選舉民は主義の如何や人物  
の如何に見るなく、買収價格の多少に依らずんば情實の爲に  
投票するのみ、既に鏡走塲裡に起つもの誰か始めより其失敗  
を待つものあらん、然れどもその選舉民が動く所は一に買収

價格にありとせば、公明なる意見も正大なる行動も能く選舉民の同情を得るに由なし、或は幾分の同情を惹くあらんも未だ以て當選の功を興くべき良手段にあらず、况んや諛誣中傷の毒矢は常に此際に發たれ、聰明なる知友すら尙迷はしむるを思へば、その効の極めて微なるを知るべし、欲せずと雖も勢ひ凡俗の爲に倣ふて多額の金員を散じ、あらゆる陋劣なる運動を實行するの決心なかるべからず、此の如きは奚んぞ皓潔を欲する氣鏡の紳士が忍ぶ所ならんや、その望を選舉運動に絶ちて高踏し、獨り群小をして猶々相争はしめ、腐敗は愈々腐敗に陥り救済の期なきに至れるもの故ある哉、

吾人は弊を摘へて代議士諸君の議會に於ける行動が、主義もなく理想もなく、たゞ權貴に阿り黃白の咬はす所となりて、議員の品格を墜し、議會の體面を汚すを罵れり、然れども翻つて思ふ、今の代議士なるものは行動の潔白なるが故に推されしにあらず、また主義の取るべきありて選ばれしにあらず、投票買収の價格貴かりし故のみ、酒食の饗應美なりし故のみ、將た壯士使役の數多かりし故のみ、主義、品性、學識は代議士たる必須の條件として數えられず、金だにあらば議員となるは易しと云はしむるは之が爲なり、此時の徒既に投票の買収に依て代議士たるを得、更にその決議權の買賣を事とするは當然なり、之を難するに墮落汚行と云ふ寧ろ酷なり、

議員選舉の際に當り、能く候補者の人物を精査し、其主張を觀察して、議員の重責を果し名譽を荷ふに足る人才を選ばずんば議會の刷新は到底望むべからず、代議士の決議權を賣

る不可ならんか、選舉民の投票を賣るまた不可なり、選舉民は或資産を有し中等以上の生活をなせるもの、何を苦んで些少の黃白に貴重なる選舉權を濫用し、延びて患害を國家に及ぼす如き事を敢て爲す思はざるの甚しきものと云べし、今や總選舉の期は目前に控へ、幾多の人物既に競争場裡に起ち、或は將に起たんとす、選舉民たるもの深くその人物を考量し、情實の爲に悉かれず苟直の如何に動かす、飽くまで自己の權利を重んじ、高潔なる氣鏡の俊才を選び、再び我帝國議會をして匪德汚行の府たらしむる勿れ、諸君の有する投票は議會の清濁に關はり國家の隆替に及ぼすを知らば、僅に一票なりとして輕んずるなく極めて深重なれ、意を用ふる各此の如くんば刷新の効を擧げ廓清の實を見る易々たる業のみ、諸君幸に之を思、他日の悔を遺すなからんを望む、 (了)

### 醫師と宗教

大岡 方 戈

吾人か身自ら極めて醫師に不適當なる事を知りつゝも、我寧ろ醫師たらんかと思へし事屢々ありき、他なし今日の我が日本の社會には、父病んで子藥を捧ぐる能はず、子病んで母藥を與ふる能はざる極めて懸然なる人民の多く、而も之が爲に同情を寄する社會もなければ進んで之か救治に従はんと欲する醫師もなければなり、慈善問題の點に於ては決して醫師のみの責任に非れば今暫く之を措くも、醫師か其患者に對して

極めて不親切なる事は是亦吾人の憤慨に耐はざる所なり、たとへば醫師に診察を乞ふに際して實に無益の時間、醫師に於ては單に無益の時間に過ぎされ共患者に於ては實に頗る有害の時間を長く徒消せざるべからざるか如き、醫師か患者に對して其養生法を注意する單に形式に止まりてよく其命令を守るや否やに干渉せざるか如き、通常の病氣は兎に角あれ、豫期に反して効驗の現はる、遅き時も更に研究の志なきか如き、吾人は實に今日の醫師の欠點と信する所なり、素より醫師たる者は多數の患者に接せざるべからざるか故に、一々の患者に婦人的同情を寄するか如きは吾人之を求めず、又願はしき事に非ざるなり、然れ共患者か醫師に其治療を托するは決して商品の賣買とは同しからず、學校に子弟を就かしむるには其教育の全權を委ねたるか如く、醫師に病氣の治療を托したるは生命の保金を委ねたるものにして人生豈是より以上の信任あらんや、醫師たる者須く其責任より考へて己の職に忠實なるべきなり、

吾人か今茲に論せんとする所は尙他の點に存す、すへての他の學者か其學理の研究に於て屢々器械的に陥るか如く、生物を研究對象とする學者すらもまゝ、器械的に陥ること尠からず、今日の醫術の如き其弊は之れなきか、今や單に藥餌にのみ重きをおかず、天然と云ふ事に頗る注意するに至りしは賀すへきも尙人類は精神上の微妙なる作用ある天然なるを看過するの弊なきか、過日新聞「日本」に連載せられたる『結核征伐』の末節を讀んで吾人類る同感に耐はす、曰く、身體の安

靜と精神の安靜とは並ひ行はれねばならぬ、是と適當に指導するは恐くは醫師の最も誠意と才力とを要する所であらう、すへて精神を勞する事は宜しからねば看護者と親族には平生此理を熟知せしめる事が肝要である、精神の過敏なる者と鬱變性の者は夫れ々方法を以て慰撫せねばならぬ云々、何を夫れ結核のみに限らん恐くは一切の病皆然らざるはなけん、人に眞實の精神上の安靜を與ふるものは恐くは宗教ならん、患者に最も健全なる宗教的安慰の道を得せしむるは醫師の大に注意すべき點と云はざるべからず、

然れ共人生に於ける大多數の迷信かまゝ同時に此處に萌す事に最も警戒せん事を要す、病人が宗教的安慰を得て精神上の安靜を導き、同時に身體の療養を怠るべからざる事は吾人の敢て言はんと欲する所なれ共、人力以上の神佛の力をかりて云々せんとするか如きは吾人の絶對的に反對する所なり、元來病氣は精神的欠陥に非ずして身體的欠陥なり、身體的欠陥なるか故に身點の療養を主とすへきは勿論なりと雖其精神か身體上に及ぼす作用は極めて多大にして且微妙なるが故に其方面の眞理を看過せざらん事を論するのみ、故に吾人は病氣に際して醫藥を却け、唯精神の修養のみを説く者を第一に排斥す、第二には醫藥を用ひつゝも尙神佛の力によりて病を治めんとする者を排斥す、今日の宗教なるものは決して呪を以て藥に代へんとするものに非ず、病氣を治療し、財産を守護し、戀愛の月下氷入たるものに非ず、而も尙人心の根底に入りて精神の太平和を與ふるものなり、吾人は此意味の健全

なる宗教のみが病を治むるに尠少ならざる効驗あるものなるを信する者なり、

從來醫師か患者の精神上の作用を全く看過するを吾人は遺憾とするか故にこゝに之を論すと雖も、又同時に精神上の事は器械の實驗に訴へて精微確實の度を明示する能はざるものなるか故に、精神的療法と云へば直に二も二もなく精神主義により、若くは神佛の直接的補助を得んとするか如き迷信を警戒せざるべからず、吾人は今日の醫師か宗教を以て直に迷信を笑ふを禁せんと欲するのみならずよく患者の精神的診察を爲さん事を望む、素より醫師に向ひて同時に宗教を説くと云ふに非ざるなり、古往今來醫は仁術なる事疑わらずと雖も、醫師は必しも仁者に非ず、醫師は先づ自ら宗教的素養を有して飽くまで患者に同情を表して先づ自ら仁者たるへし、又治療に於て精神的要素を思考の中に入れて健全なる宗教を度外視すべからざるなり

社 會

滿洲條約

露國か滿洲經營に力を傾注したることは、一日の業にあらずして多年の希望としたる所なり、從て幾度か試みんとして蹉跌を來し常に失敗に終りたるもの、所謂滿洲條約これなり、而して此滿洲條約は去る八月を以て北京に於て調印せ

られたるの報に接す、該條文を一見するに穩當にして且つ正理なること、之を前年の酷なる條約に比して殆ど雲泥の差ありといふへし、露國か退讓の意を顯はしたるに付ては驚くべき程にして、是によりて清國は全く滿洲に於ける主權を回復したる者として可也、試みに條文を一括して之をみるに該條約は四個條より成立し第一條は領土の返還、滿洲の撤兵を明言し、第二條は撤兵の期限、第三條は滿洲駐在軍隊の員數、第四條は鐵道運附の條件を根本として規定したるものなり、抑々吾人は露國の深意を知らずと雖、此の條約の締結によりて露國か滿洲一切の主權に關して寸毫も容讓するの權利を失ひ、清國をして領土保全を明確にしたることを賀せざるべからず、然れども吾人は此條約の調印によりて多くの滿洲問題か直に解決したりとするものあらば、そは大なる誤謬といはざるべからず、露國をして爾かく退讓の必要を感せしめたるは、或は日英同盟に對する反抗にあらざるなきか、若し果して然りとせば露國の退讓は一種の政策を含むものにして、日英兩國は深思熟考せざるべからざるなり、

殊に吾人の最も憂ふる所は清國よく滿洲に對する主權を完了するや、否やにあり、今日の現狀よりすれば甚だ覺束なき事なり、若し清國にして滿洲を經營するの能力足らずして、網紀撥類し、秩序紊亂し、乃ち茲に平和攪亂するに至らば、露國は猛然として起ち再び野心を逞うするの好機を得たるを喜ぶや必せり、蓋し露國の眞意此にあらざるなきが、今日の讓歩他日大に得る所あらんやもまた未だ俄に知るべからざるなり

るなり

内務省の訓令

内務省にては來るべき總選舉に對し、神職僧侶は政治に容喙し時事に狂奔し其職分を怠るべきものにあらざるとして左の如き訓令を發せり

神職は神明に奉仕し齋肅恭敬其職を盡くすを本分とし苟も政治を論議し政黨に關與するが如き本分以外の行為あるを許さず故に明治二十七年衆議院議員總選舉に當り訓令第五號を以て特に戒飭する所ありしに今や總選舉の期又將に至らんとす神職たるもの宜しく其本分を顧み選舉關係等の行為無之様嚴重監督すべし (北海道廳各府縣)

各教宗派の教師僧侶たる者は布教化導に力むるの外又他あるべからず若し夫れ政治に容喙し時事に狂奔する如きは當に其職分と相容れざるのみならず其弊や洵に尠しとなさず此に於て本大臣は數々各管長に訓諭し派内を戒飭せしめたる所ありしに今や衆議院議員總選舉の期將さに迫らんとす此の際管長に於て派内の教師僧侶に對し苟も本分を紊る者無之様嚴重訓戒を加ふべし (各宗管長)

第十回釋尊降誕會

(大日本佛敎青年會)

例年の如く大日本佛敎青年會にては、第十一回釋尊降誕會を去る八日神田錦輝館にて小さき美しき花見堂を飾り天上天下唯我獨尊佛を安置して祝賀會を催せり前日の雨に引きかへ天に一點の雲翳なき好日なりしかば、來會者雲霞の如く無慮三千餘名と註されぬ、午後一時會の幹事和田鼎氏起つて開會の趣旨を辯じ、次に黒田眞洞師(佛敎徒の大責任)北村教嚴君(精神主義)新井石禪師(唯我獨尊)齋藤唯信師(惡魔降伏)南條文雄師(擇其善者)近角常觀君(將來の佛敎)村上真精師(釋迦何人ぞ)の諸氏交るゝ演壇に顯はれ、各々得意の快辯を振ひ殊に今般歸朝したる近角氏が滿腔の熱誠を以て、歐米各國の宗教制度、宗教哲學、及びその信者の狀態を説て我國民と宗教との關係に論及し、難澁なる宗教哲學の研究は竟に信仰を確立する所以にあらず、而して信仰の確立は佛敎八萬四千の經論中優に其餘地を存せりといひ、宗教は藝術物にあらず、須らく眞摯なる態度を以て之に迎はざるべからずとて滔々二時間に亘りての大氣焔は、頗る滿場の聽衆を感動せしめしが如し、演説終て樓上に茶話會を開き、少年音樂、薩摩琵琶、狂言、西洋手品等の餘興あり、これ亦非常の盛會にてこの席に列するもの男女老幼、無慮千三百名、尙當日の來會者には遺響と題せる、經論中の警句を抜粹し、終りに片山博士の般若心經の和譯をかかげたる小冊子を來會者に配布したり

猶同日南條博士の發議にて福井市大火罹災の爲め席上義捐金を募りたるに直に四十圓に及ぶ、翌九日福井市役所へ向け遞送せりと云ふ

▲能州、能登郡支部にては同日酒井永井寺に於て釋尊降誕祝賀會を催せしに  
 參會者無慮二百五十名、手塚賢吉、諏訪安太郎、道上大藏、藤澤篤、笹川嘉四郎、金剛祥榮、野田隆、孤峯白巖等の諸氏各々熱心を雄辨を振られ、聴者一同と共に三千年の昔を忍ばれたりと云ふ

### 眞龍女學校の卒業式

安藤正純氏の獨力經營に成る眞龍女學校は去る四日第一回卒業證書授與式を舉行されたり、劉曉たる音楽と共に式は始まれり、卒業證書修業證書授與し終りて、校長安藤氏の報告あり、其要に曰く創業以來既に四星霜、現在の生徒五十名に近く、益々増加の見込あるも教室狹隘に付一切謝絶し居ること、學業の他の學校に比して當校の一年生は二年生、二年生は三年生の學力あること、入學中途にして屢々生徒の廢學を見るは父兄の貧困によること、今回僅に三名の卒業生を出したるも是か爲めなり、將來見込ある生徒を十分に養成したくも、父兄貧の爲め我娘を賣りて糊口の料に代うる爲め十分の教育出来かたき等、よく貧民窟の状態を詳述して、來賓一同をして不覺同情の感に打たしめたり、報告終ると共に村上博士齋藤雅信二師の懇篤なる談話ありて式を終へ來賓一同に折詰を饗せり、一同歡會したるは正午過ぎなりき、此間可憐なる少女はいとも行儀正しく、妙へなる聲して佛敎唱歌を

歌ひしは吾等無限の思をなせり、安藤氏の苦辛察するにのみありといふべし

▲徳風夜學會の證書授與式 瓜生四恩會並に文學士常磐大定の設立にかゝりて商家の徒弟又は家計の都合上就學する能はざるものほ簡易なる普通學を授くるの目的なる 本郷弓町二丁目田中小學校内の徳風夜學會にては去る九日第一回卒業證書授與式を舉行し會長常磐氏證書を授與し次に安達憲忠吉田賢龍並に村上博士の講話、修業生總代の祝辭、卒業生總代の答辭あり來賓三十餘名因に記す同會は今回の卒業六名、現在生徒三十六名なりといふ

### 教界彙報

▲會頭久我侯爵は本多學士芳川雄管外敎氏を従へて去る九日九州巡回の途に就きたり日割左の如し

十日	上野	十一日	大津
十二日	奈良	十三日	京都
十四日	京師	十五日	道中
十六日	姫路	十七日	道中
十八日	道中	十九日	大分
二十日	道中	廿一日	四日市
廿二日	行橋	廿三日	福岡
廿四日	久留米	廿五日	日田
廿六日	道中	廿七日	熊本
廿八日	佐賀或は武雄	廿九日	大村
三十日	長崎	五月一日	道中
二日	道中	三日	四國高松

▲一旦歸京したる近角常四氏は去る十日、又清澤講之師は十三日相前後して京都に入れり  
 ▲伊勢一身田の郷里にある眞岡湛海氏は去る六日華燭の典を擧げたる由  
 ▲大日本敎育青年會には今年夏より九州東北地方に向て巡回講演を開始する

由、講師如左

島地默雷師 大内青樹居士 村上嘉情君  
 南條文雄師 釋宗演師 北村教殿君  
 眞岡湛海君 石川成章君等

▲同會幹事田原君は講習會の用務を帯びて去る八日の夜美濃登老に向ひ出發したり  
 ▲日蓮宗にては宗祖立教の六百五十年の紀念法要を帯び由  
 ▲越前永平にて承陽大師六百五十回の紀念法要を帯びて付、曹洞宗大學林生徒數十名は本月十日徒歩參拜の途に就きたりと云ふ

### 紛々録

◎今でこそアイヌ人は北海道の一部に墾居し、言もなく勇もなく蒙昧暗愚の生活を爲して何等の勢力なきし、嘗ては本州は固より四國九州までも蔓延し、其性標準にて一方ならず我大和民族を懼したりき  
 ◎されど數百年に亘る長歲月の間、猛烈なる生存競争の結果アイヌ人は遂に敗れて大和民族に風從し、此邊に逐はれて本州以南その影影りく、た、昔後等の佳みし名産としてアイヌ語の地名を遺蹟を存するのみ  
 ◎能登、伊豆の國名、富士、北其、惠那の山名、江戸、須磨、熱田、小田井の地名等の如き固なる學者は日本語もてその意味を解せんと思われど、此等は明にアイヌ語より來れるものなり、奥州地方に存するチャミはアイヌ人の遺跡なり、帝國の諸方にある石器時代遺跡もまたその遺す所なりとす  
 ◎支那民族を懼ませし北狄の如く、大和民族を苦めたる蝦夷人が、人をして上古の蝦夷人は今つアイヌ人ならざるべしと疑はざらむる程衰弱し、些の氣力なきは之れ強者の壓伏に在るなり  
 ◎人は云ふ朝鮮人は無氣力にして獨立の念なしと、されど此に至りしは當然なり、東南よりは常に勇猛なる日本人の没入を受け、西北よりは開化せる漢人の攻撃絶ふる時なし、強國に隣せる弱國は哀むべきものなり、ありし氣力も勇氣も消耗して惰弱のものとなし去るはアイヌ人に異ならず  
 ◎大和人の傍にあれば俊才も驥足を伸ばす能はず、畜に伸ばす能はざるのみ

らず、ありし技能は消耗して凡人に比す、弱口となるも牛後と云ふ句れとは道般の事を云へるものか否か、

### 雑録

### つよらぬ記

(巡遊餘生)

劍虹生

◎名物においしきものなしとはよく人のいふ所なるが、鯖江の菓菓糖、三國の鶯餅、金澤の長生殿岐阜の松風の如きは一を舌鼓行の馳して賞味したるものなりき  
 ◎滑川に於て演説後、二三の有志者來訪せり、談は村上博士の佛敎統一論より始まりて、種々の難問續々として起り、高陽兄一人にて受太刀の姿となり、旗色稍々動くを見て狂村兄は例のしかね氣を出して應援を試みしも、敵益々肉薄し來り迫り、鋭鋒當るへからず、頗る危く見ゆ、時偶々晚餐を運び來るに會す、論戰遂に止む、われは今尚高陽兄の窮狀を思ふて獨笑を禁ずること能はざるなり  
 ◎余の富山市に入りて會場に着したる時、無妻主義の乗杉狂村兄か、突然これは愚妻である妻君を紹介されたるには頗る一驚を喫したり、心機一轉の世の中なれば、狂村兄の一轉又は再轉したるも無理ならぬ事あらんか  
 ◎狂村兄か例の麻の法衣を纏ふて、免因保護事業に従事した

る事に付ては余の竊に危む所なりしが、今や成績の多少見るべきものあるを聞き深く同情の念を惹起せり、時間の餘裕なきを以て訪問することを得ざるを憾とす。

◎富山市の各宗僧侶協同して、毎月二回、日を期して慈善托鉢を行ひ、其得たる喜捨金を擧げて、各種の慈善事業に投する仕組なりと、美譽といふべし。

◎眞宗僧侶が初め各宗僧侶と托鉢をなすに當り、慣れぬ事として、或者は讀經の聲さへ出せず、或者は鐵鉢を深く法衣の袖に隠し、或者は手を懐にする杯、其態度頗る滑稽なりしと、此等の物語をき、一行不覺腹を抱へて笑ひ興しぬ。

◎三河知立町に入りて、余の少しく驚きたるは料理店の多き事これなり、知立は昔の五十三驛の宿場なればにや、はた風俗の事は如何にや。

◎津の聴潮館にて稻垣君と恭を圍み、吾ながら心地よく敗北しぬ、これにも懲りず、和倉温泉にて村上管事とまた一戦を試み、これも首尾よく敗北せり、由來天狗心は起すまじと竊に覺悟したり、去りてて下手の横好きはなかく止むべくも見えず。

◎瀧車、大聖寺、小松、松任驛等を過ぐるに當り、車窓より遙に殿堂の巍然として半空を摩するの壯觀を望み快いふべからざるものありき。

◎曹洞宗の高僧戸澤春堂師短身瘦軀なるを以て、福井新聞にて一寸法師と冷されしは洵に適評なりき、高陽兄の政教新聞にて童顔の文學士と云はれしは當れりや否や、吾之を知らず。

き、また論理明晰にして一絲紊れず、條義の整然たることは、頗る識者の満足を買い申候、大谷派改革、白川黨組織の當時には慷慨志士の態度を以て演壇に立ち意氣天を衝かんばかりなりしが、精神主義を唱道してより以來は、精神修養の結果なるか、諦め主義の實行なるか、若しくは病魔の然らしむるところか、元氣漸く沮喪して、前日のおもかげを失ひ、從て演説を爲すことも少なく、たまに懇親會、談話會の席上などにて口を開くも、いつも、ナサケナキ、アワレツボキ、斷念的、悲觀的、消極的、申譯的の陳述にて御茶を濁すを常とせられ候、かくては精神主義者とはかくなるものかとの世人の思わくも如何かと御案じ申上候、今一層御奮發ありて、論陳堂々、精神主義の鼓吹に努力せられんことを望ましく候、左りども精神主義なるものは徒らに俗物の間に振り廻すものにはこれなく、唯佛與佛、乃能究盡の御見識に有之候や、さすれば、精神界にての御氣焔は如何に御座候や、御序に御意見の程何度存候、

▲近角常觀先生

洋行してハイカラーになるは日本人の常に御座候、近角常觀先生は全然之と撰を異にして、洋行して蠻骨に相成候、其の容貌よりいへば先生は先天的にハイカラーの人間にはこれなく、徹頭徹尾、蠻骨風に御座候されば先生が洋行して依然蠻骨的風采を保つは敢て珍らしからぬことと存候、さりながら先生の蠻骨思想は歐山米水の間を週遊して、いくばくかハイカラー的たるべしとは、一部の佛教徒が豫想せしところな

◎看板の稍々見るべきものは名古屋市にして他はいふに足らず、北國に至りては論外なり、煙草の看板のみ多く、殊に北陸第一の都會たる金澤市が最も甚しきを見る、北國人士が嗜好上の程度は知らざるも、吾人は何となくいやさを催せり。

◎津市の道幅狭ましく而も一直線なる所、これ禪町の練名ある所以か、桑名町に至りては道路險惡中央の路は骨立して、瘦馬の背のそれにも似たらんかし、富山市の塵埃紛々たる、腕車の乗りにくき、これ等の事數へ來らば尙ありぬべし、今は多く記憶せず。

◎丁應上人を訪みて北國一の大煙草盆をみる、疊二枚餘に誇る珍無類の道具なり、蓋し上人元來奇人なり、小松には此種の人多しとかや。

佛教辯士の評判

(三)

白稱辯士

▲清澤浦之先生

先生の演壇に顯わるゝや、二つの人と異りたる點有之候、一は全身の三分の二を演壇のために隠さるゝことにして、他の一は瀬戸の赤塗りの啖吐きを壇上の水呑と並列することに御座候、更に奇妙なるはこの壇上の二物に入出二門の用を使せしむることにて有之候、此の如き異點は決して演壇上の愛嬌とはならず、殊に演説家ならぬ先生の演説は言廻わしに巧なることもなく、亦敢て輕快の辯をも有せざれども、至誠表に溢れ、言々肺腑をついて出るところは、大に聴衆の同情を惹

るに先生は洋行してより却て更に一層の蠻骨思想を加へ候、去る八日神田錦輝館の釋尊降誕會に於ける二時間に亘る大氣焔、豈に蠻骨思想の發現に非ずや、簡短といわれ、長いと叫ばれるも、一向に頓着なく、終に臨んでを幾度か繰り返へし、言はんと欲せし所を竟に言ひ了りしが如き、豈また蠻骨風の演説振りに非ずや、其の調子に乗りて論じ去り論じ來るや、熱心表に溢れて己を忘れ、水なきコップを傾け、蓋のしある水瓶より水を注がんとし、頭をかき、手を振り其の風采態度にいさゝかの修飾を加へず、聴くものをして、知らず識らず、其のゆるみなき四角四面の長談議に耳を傾けしむるの徳を備へ候、演説術としては非難は免れざるべきも、先生が演説の長所は實にこゝに御座候、先生が如き蠻骨的の辯説、思想、容貌を以て教界を騒がす一幕の活演劇は近き將來に於て開始せらるべく頗る見物と存候、

▲北村教嚴先生

舊姓中尾、近く北村氏を襲ぎたる先生は訥辯の間に一種の辯才を有せられ候、先生の演説には何處となく妙害の出來ぬ一種の愛嬌を備へ候、信州は四方山を以て圍み、摺鉢の底の如き地勢なり、かくの如き地に育ちたる人の心は険隘にして、常にケチ／＼せりと言ひ放ち、一隅ノ／＼の聲あるや、直ちに言を改めて、然れども卓然屹立せる山嶽の圍遶は、また其の間に養はるゝ人をして、堅忍不拔、毅然として時流になづまずと御世辭を振り蒔くが如き、豈に捨つべからざる愛嬌に候はずや、先生嘗て演説して曰く、余は北國の生れなり、

北國は四面海を以て廻らし、眼界廣潤なり、故にかゝる處に生れたる人は胸宇曠大なり、然れども海の廣さが如く、何處となく要領を得ずと、然り先生の演説は御白の如く、何處となく要領を得ず候

信 界

一念の安慰

柳川生

人の性格は一擧手一投足に其全豹を表して居る、筆跡を以て能く人の性格を判することか出来るのは、不知不識の間に自分の性格を一字の手跡にも顯はして居るからである、人の性格は、茶碗を持つ手にも、下駄を履く足にも談話する口にも、一刹那々々々一念々々の行動に性格の全體を表して居る、若し聰明な人でありたなら、茶碗の持ち様で以て此人は性急な人だとか沈鬱な人だとか、或は此人は殘酷な人だとか仁慈な人だとかの判断を誤らずにすることが出来るのである、そうして見ると吾人の一念一刹那の行動は自己の價値を表白する大看板である。

世には自己の價値を韜まらうとして種々の苦心をするものがある、否多くの人はこれである、自己の價値已上に思はれ様とする偽善の心は私共の念頭を去らな、そこで人の前へでも出る時は、平生にも似ず鹿爪らしく粧ふて、いかにも殊大看板である。

在 一念一刹那の心情を眞面目に觀じ来りたならば、不満足な不安感卑劣な自分ながら愛憎のつざる罪惡の塊りと云ふ感に打れるであらう、花に戯れ月に嘯くなど一時的の快感に打たれることがあつても、それは、掌の間の喜びで永久の歡喜ではない、仔細に考へたら其喜びの一念にも不安な不快な思ひが潜んで居るのである、

注意に注意をして薄氷を踏むが如くにせねばならぬ行動は、そんな不安感な心情から生ずるものとせばそのいかに恐ろしい醜いものであるかは言はずもかなである、いかに自己の省板たに行動を謹ますとすると、意馬心猿いつも逸し勝ちで、醜い行動の上にも醜い行動を増すのみである、

かく、眞面目に一念に就て自己を觀じて、不安感な不満足な心情なりとの自覺の念かあるならば、その人の心の闇にははや一道の光明が閃いて居るのでありて、其人の心の奥底には微妙な響きを聞き得るのである、その響きは佛の聲である、救済のみ手である、不安感の念を轉じて大安慰を與へようとの聲である、不満足心を翻して満足心に住せしめんとする響きである、この微妙な琴線に觸れた人は幸福な人である、光明の人である、大道を行く人である、大眞理の洞見者である

微妙な琴線に觸れては微妙なる音楽を奏つるものである、この安慰の地盤に樹てる人の一擧手一投足は奇麗な立派な性格を表す看板でありて、窮寇な世界でなくて寛宏した世界で、永久の歡喜を以て世に處するとか出来るのである、

勝らしく思はれ、いかにもエライ人の様に賞められたいとする淺やかな量見は、此偽善心より生じ来るもので、これが自己の性格の價値を韜まらうとする滑手段である、勿論かゝる卑劣極る行動は男子として耻づべきことであるが、この滑手段は到底効を奏しないのみならず、却りてそれで自己のをどましい性格を表明するに過ぎない、たとへ、或者はこれが爲に欺かれることがあるとも、少し鋭敏な人の爲に直ちに看破されるもので、かゝる淺ましい手段は恰度かの蚤の頭次を匿すのど一般で愚の極と言ふべきである、されば狗肉を賣るに羊頭を掲げ様など山師的看板は何等の効を奏せないとしたならば私共の一念一刹那の行動は正直正銘の性格の看板である。

かく一念一刹那の行動が正直正銘に自己の性格を表明して居るとすれば、平常の動作一念々々に非常の注意を以てして、決して粗漏にすることは出来ぬのだ、果して然らば、ナント世に處する道も又窮窟な無意義なものではないか、かの戦々競々薄氷を踏むが如しとは、此間の消息を漏して居るものであらう。

また思ふ、私共の心情は奇麗な立派な行動をする奴ではない、醜い耻かしい行動をして居るもので、常に々々不満足な不愉快な、これではく自分ながら恐ろしい心情なのである、要するに私共の心情は不安感の狀態である、なにも世の所謂宗教家の口吻に倣つて、過去の罪惡を追求しなくとも、現將に來るべき臨終をとりつめ、死の問題を提起せずとも、現

今昔

前田利家 (第三章の續き)

(少年期)

百目木劍虹

昔は煩悶の一念、今は歡喜の一念である、乞ふ宗祖の「一多證文に」垂れ給ひし聖訓を味てや

「一念ハ功德ノキハマリ一念ニ萬徳コト、トク具ルヨロツノ善ミナヲサマルナリ」

英雄もまた時代の子たるを免れず、利家の事業に見むとせば豫め時代の狀勢と四圍の境遇を窺ふを忘るべからず、請ふ暫く筆を轉じて宇内の形勢を説かしめ、戰國時代混沌たる無秩序の天下は尙武敢爲の氣魄坤輿に磅礴し、桓々たる武夫をして赤手能く大業を成し偉勳を奏せしめ、六尺の丈夫兒溜天の壮志を抱いて、龍驤虎躍の意氣を蓄へ、豪傑自ら許して事を好み、機に乗ずべしあらんか、直ちに劍を掲げ卒伍を率ゐて一方に據り、勢を中原に張りて鹿を逐ふに汲々し、一人の幽邃なる眞理攻究の哲學者となり、安心立命の信念を衆に分つ宗教家たらむとする者なく、また社會の大勢は此等の徒の存在に便ならず、世を擧げて滔々戰略兵法に耳傾け、擊劍操銃の技に勵み、牌を撫して風雲の際會を望み、伊勢の新九郎長氏(一四三二—一五一九)孤劍漂然郷を去つて東遊し、一







●元中尾事北村と改姓す 北村 教 嚴

◎轉居

本郷區眞砂町 一七 聚精館

桑 門 典

鐵毒被害民義捐金第五回報告

伊那佛教青年會

一金六十八圓 信州  
（前號藤尾種子の六十錢とあるは拾錢の誤、從て累計は四十五圓五十八錢なり）  
總計百拾三圓五十八錢  
右金額は本月五日鐵毒被害民救濟佛教有志會（芝區愛宕町佛敎新聞社内）宛送金の手續を了せり、右報告す。

◎生儀今般無事歸朝致候此段辱知諸君に謹告す

四月

大日本佛教徒同盟會内

近 角 常 觀

### 福井市罹災救恤義金募集

福井市は古來佛教界の重鎮にして今猶奉佛の信徒常の諸在の寺院に溢れ其の盛況日本國中稀に見る所あり然るに去月二十日祝融氏狂風に乗じて猛威を逞うし僅に數時の間に同市の大半而も樞要ある街區を燒盡し東本願寺別院等寺院三十民家三千五百悉皆烏有と爲り許多の死者傷者を出たし衣食かき者に至りては幾と算かく其狀筆紙の得て盡くす所にあらず實に近來大慘事と謂ふべし本會之を默視するに忍びず自ら進んで斡旋の任に當り廣く義金を募集して之が救恤の資に充てんと欲し此に讀者諸君の慈心に訴へて善財の寄附を切望す

◎五月十日限◎五錢以上◎郵券(五厘)代用不苦◎義捐金は本會宛 東京本郷區森川町一番地

四月

大日本佛教徒同盟會

文學博士井上哲次郎先生序  
文學士有馬祐政先生著

## 日本哲學要論

全一冊 紙數三百餘頁  
洋裝背皮金文字入頗美裝  
定價九十錢郵稅十錢

本書は古來日本に現出したる一切の思想を網羅し極めて簡潔なる文章を以て其要綱を記し其由來を論せられし者にして實に未屑有の好著也神道儒道佛教道敎各派に就きて適切なる評述をなし而して卷首には其等の調和派に屬する著書等を載録して武敎及心學の諸家に追ひ卷末には現代の諸家を評し更に東西諸外國の哲學に對照して以て本邦思想界の大勢を辨明せられたり讀者之に依りて容易に祖先の遺教に接するを得又日本の新國光を認むるを得べし學者教育家宗敎家は勿論苟も本邦の思想界を知らんと欲する仁は必ず座右に供せられよ

發行所

光 融 館

大日本佛教徒同盟會出版部  
(電話番號本局二四三三番)

電話本局二千九百九十九番